

# 子宮

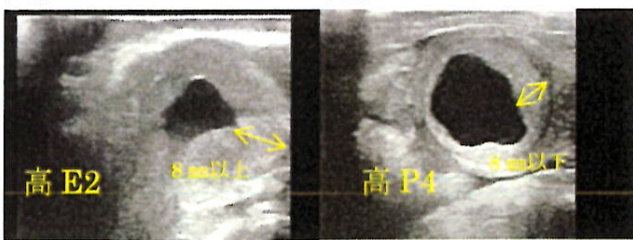
直腸検査からエコーを使い始めると、手の感覚から目での確認が加わります。自分もエコーを使い始めた頃は、慣れないプローブ捌きや目で得る事のできる情報量に時間がかかった事を思い出します。限られた時間で見ていくと、時間の配分を卵巣にフォーカスしがちですが、子宮にも時間をかけて見て欲しいと考えます。例え話ですが、卵胞から排卵する卵子が作物の種とするなら子宮は畑だと考えられます。どんなに良い種でも畑が荒れていれば作物は育ちませんし、逆に畑が良くても種が悪ければ畑から芽は出ません。さらに黄体は太陽で芽が胎児だと考えると想像が付きやすいと思います。

## 子宮内膜

子宮内膜の厚さを見ると発情なのか凡そ判断ができるくらい子宮は卵巣からのホルモンに影響を受けます。

子宮内の炎症による汚れなどを見ることは大前提ですが、ここでは子宮内膜の厚さが発情時や黄体時に必要なホルモンがあるのかの指標として見て頂きたいです。

画像 1



画像 1 と 2 は子宮内膜を写した画像です。子宮内膜の厚さは黄体退行期から増加し排卵前に最大値となります。

発情時の内分泌環境のエストロゲン (E2) が高いと子宮内膜は 8 mm 以上と厚くなります (画像 1)。

黄体期では内分泌環境のプロゲステロン (P4) が高いので子宮内膜は 8 mm 以下と薄くなります (画像 2)。

図 1

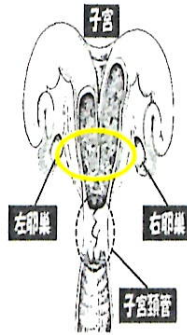


図 2

## 子宮内膜厚と受胎性関連

・ オブシク時の子宮内膜厚

	8mm 以上	vs	8mm 未満	
排卵率	98.1%		86.0%	
受胎率	42.7%		26.7%	d35-41

W. H. Bank, Theriogenology (2013)

エストロゲン (E2) が発情時に高いと卵胞内の顆粒膜細胞が多くなる事で、その後の黄体機能にとっても重要になります。

発情時に子宮内膜の厚さが薄いと排卵遅延や卵巣静止が考えられます。移植時に子宮内膜の厚さが厚いと共存卵胞からエストロゲン (E2) が多く出ている可能性が高い事から移植の受胎率低下を招きます。

子宮内膜の厚さをみる所は図 1 の子宮に印を付けた場所で見られる様になっています。

図 2 のように発情時の子宮内膜の厚さをみることで排卵率や受胎率にも差がでてきます。発情時には子宮内膜の厚さが 8 mm 以上なのか、移植時には子宮内膜の厚さが 8 mm 以下なのかを見る事はとても大切です。

卵巣だけではなく、子宮の汚れや粘液を見たなかで、発情時や移植時の適正な子宮内膜の厚みなのか確認する事が、その後の受胎性に大きな影響を及ぼします。

おおた